



ペテロの手紙第一の構造

1章～5章

1ペテロ 1:3-5:11 十字架と復活の4つの側面 (御霊の成就)

40 2:11-3:7 ① 従 主に従うように	1:3-2:10 ② 父 ③ 信仰 あわれむ-信じる(キリスト、父) 預言 ことばは決して変わる '父'と'子' 神の民と'子'	1ペテロ 1:3-5:11の。 1:2, 5:12に密約さへている
7 4:12-5:11 ④ 血	3:8-4:11 ⑤ 聖 ⑥ 愛 キリストが十字架におこ 霊が注ぎかけ。vs 肉 御霊の實(兄弟愛、善心)	5:12 A' 簡潔に書き送り 義 言 告げること C' 奮勵をさし 義 行 行なうこと B' 神の真の恵みであること証しし 恵 言 D' 恵みの中にしかり立ていざい 恵 行

・ 恵みの証し
・ 使 14:3, 14:17, 15:8
1ペテロ 神 ペテロ
・ 17/1, 2/4

1:2. 選ばれた人々へ

② 父: 父なる神の予知に従い	aabb	abab	父
③ 聖: 御霊の聖めにあつて	～のび選ばれた	～のび選ばれた	善悪
④ 従: イエスキリストに従うように	～のび選ばれた	～のび選ばれた	子
⑤ 血: またその血の注ぎかけを受けるように。(イエスキリスト)	～のび選ばれた	～のび選ばれた	子

ペテロの手紙第一、全体をやっと分析が終わりました。

1章2節に導入があります。「父なる神の予知に従い」1番目。2番目「御霊の聖めによつて」。3番目「イエスキリストに従うように」。4番目「またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ」。この4つのポイントが全体を構成している枠組みになっています。

「父なる神の予知に従い」これが1章3節から2章10節まで。神様はあわれむ、それに対しての応答として民は信じる。信じる者はあわれまれる。あわれまれるので信じるという神となり民となるという関係をここで語っています。その救いについては、予め預言されていた。そのことばは決して変わることはありませんというのが1章3節から2章10節「父なる神の予知に従い」です。

2番目の2章11節から3章7節。ここは、「イエスキリストに従うように」という段落です。それは、そんなに難しくありませんでしたね。こういう人たちは従いなさい、こういう人たちは従いなさいという具体的な命令がずっと並んでいますけれど、主に従うようにあなたがたは従いなさいという段落です。

3番目の3章8節から4章11節。ここは「御霊の聖めによつて」という段落になります。キリストの十字架と復活の短くまとまった説明が2度出てきます。ノアの話も出てきます。バプテスマの話と最後に裁かれる話です。キリストの十字架によって、霊が生きられる、肉に対して戦って御霊の實を結びなさいというところが強調されています。兄弟愛、互いに愛し合つて善を行う。その御霊の實を結びなさいということが命じられている「御霊の聖めによつて」という段落が3番目です。

4章12節から5章11節。ここもまた、長老たちよ、若い人たちよ、こうしなさいというようにありますが、これは「キリストの血の注ぎかけを受けるように」選ばれた

というところですね。「キリストの血の注ぎかけを受けるように」とはどういう意味かというのは、こういう段落を見るとわかります。苦しみを受ける、試練を受ける、けれども、栄光を必ず最後には受ける者となるということが、「キリストの血の注ぎかけを受けるように」と言われていることだということがこういうところからわかります。ただ単に、十字架の苦しみが来しましたよ、十字架ですよ、大変ですよということではなくて、その苦しみは栄光を受けるための苦しみだというのが、「血の注ぎかけを受ける」という意味です。

それが、この段落で説明されていますので、最初に選ばれた人々へ、神様の子どもとされた人々へ。もう一度集められて…散っていたのですよね。散っていたけれども、もう一度集められて神様の子どもとされた人々に「父なる神の予知に従い」、「御霊の聖めによって」、「イエスキリストに従うように」、「またその血の注ぎかけを受けるように」という4つの段落で励ましてくれている手紙になります。

1ペテロ 1:3-5:11 十字架と復活の4つ(別面) (逾越祭の成就)

40 2:11-3:7 ③ 従 主に従うように	1:3-2:10 ① 父 ④ 信仰 ・あゆむ(信) 信(キリスト、父) ・預言 ことばはあきらまひ ・父のひとり 神の民を召す	1ペテロ 1:3-5:11は、1:2, 5:12に密約されている
・苦しみの試練を 受けるが、栄光を受ける	・キリストの十字架にあて 聖めを受ける。vs 肉 ・御霊の聖め(大罪を善)に結ぶ	5:12 A' 簡潔に書き送り 善 言 聖め C' 権威をさし 善 行 聖め B' 神の真の恵みであることを証しし 悪 言 D' 恵みの中にしおりに立っている 悪 行
47 4:12-5:11 ⑤ 血	3:8-4:11 ② 聖 ⑥ 愛	

・恵みの証し
使 14:3, 14:17, 15:8
1ペテロ 神 1ペテロ
1コリ. 2:4

1:2. 選ばれた人々へ

- ① 父: 父のひとり神の予知に従い
- ② 聖: 御霊の聖めにあて
- ③ 従: イエスキリストに従うように
- ④ 血: また、その血の注ぎかけを受けて受けるように。(12:12)

aabb ～のびに選ばれた	abab 善悪	父
～のびに選ばれた	いのち	聖
選ばれたらで～せば	善悪	子
選ばれたらで～と召す	いのち	子

この4つのポイントは、最初は「父」、次は「御霊」、3番目は「子」、4番目も「子」について言っています。最初の2つは、選ばれた理由です。「父なる神の予知に従って」選ばれました。「御霊の聖めによって」選ばれました。だから、こうしなさいというのが「イエスキリストに従って血の注ぎかけを受けて栄光に至るまで忍耐するという、選ばれたのでこうしなさい、選ばれたのでこうなります」という段落の平行があるかと思えます。

別の観点で言うと、「父なる神の予知に従い」これは善悪。知恵ということでしょうね。2番目は、「御霊の聖めによって」生きる者とされる、いのちについて。「イエスキリストに従うように」善を行う、善悪について。最後は「血の注ぎかけを受けて」永遠のいのちを受けるといふ、いのちの段落。「善悪」、「いのち」、「善悪」、「いのち」というようにも分けられると思えます。

1ペテロ 1:3-5:11 十字架と復活の4つ(側面)
(過越祭の成就)

40 2:11-3:7 ③ 従 主に従うように 1:3-2:10 ① 父 ④ 信仰
・あゆむ - 信じる (キリスト、父)
・預言 ことばはあかし
・父の恵み 神の恵み

・苦しめ 試練を
・愛するが 救済を受ける
キリストの十字架におと
すは生かすこと vs 肉
・御霊の賜 (父の恵み) 結ぶ

7 4:12-5:11 ⑤ 血 3:8-4:11 ② 聖 ⑥ 愛

1ペテロ 1:3-5:11 1:2, 5:12 に要約されている

5:12
A' 簡潔に書き送り 善 言 告げ知らせ
C' 勧めをし 善 行 行なはせ
B' 神の真の恵みであることを証しし 恵 言
D' 恵みの中にしっかりと立っている 恵 行

恵みの証し
・ 使 14:3, 14:17, 15:8
1ペテロ 神 1ペテロ
・ 174, 2:4

1:2 選ばれた人々へ aabb abab
① 父: 父なる神の予知に従い ~ 恵みを選びわたす 善悪 父
② 聖: 御霊の賜におとす ~ 恵みを選びわたす いのち 聖
③ 従: イエスキリストに従うように 選ばれた人々へ 善悪 子
④ 血: 主の血の注ぎかけを受けるように ~ 選ばれた人々へ 恵みを選びわたす いのち 子
(イエスキリスト)

全体はその4つに分けて選ばれた人々を励ましてきましたけれど、最後の挨拶(5章12節)。「私の認めている忠実な信仰の兄弟シルワノによって、私はここに簡潔に書き送り、勧めをし、これが神の真の恵みであることをあかししました。この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。」この簡潔な文章の結論部分。導入と結論のこの結論部分も4つに書いて教えてきたところが全部入っている要約されている文章だと思います。

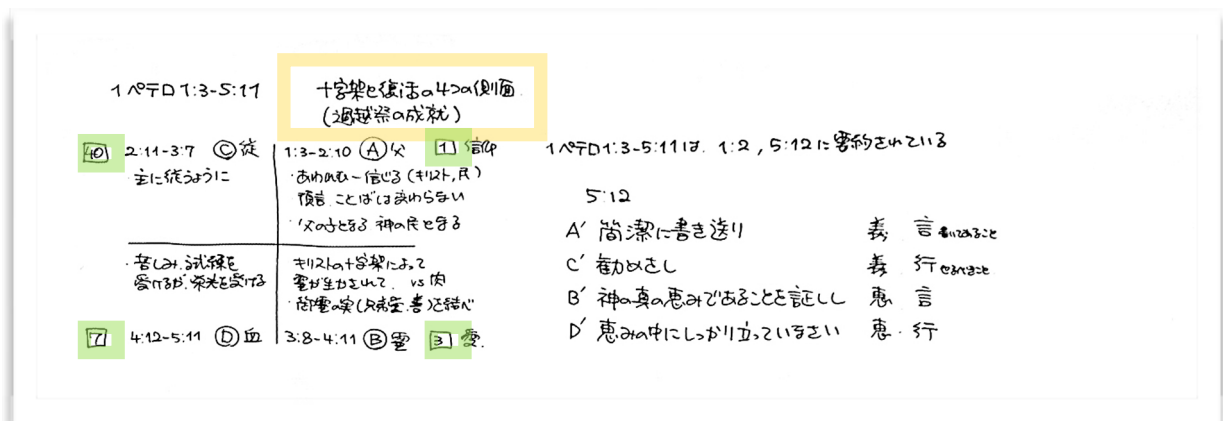
「簡潔に書き送り」が「父なる神の予知に従い」のところ。「勧めをし」が「イエスキリストに従うように」、「神の真の恵みであることをあかし」が「御霊の賜によって」、「この恵みの中にしっかりと立っていなさい」が「血の注ぎかけを受けるように」。順番がちよっと違いますけれど、これは、本文と同じ順番ということです。

「簡潔に書き送り」が1章3節から、「勧めをし」が2章11節から、3章8節から「神の真のめぐみであることをあかし」て、4章12節から「恵みの中にしっかりと立っていなさい」という全体の文章の流れと同じ流れで要約されて勧められています。簡潔に書いてあること、その正しさを書きました。そして行うべきことを教えて、恵みのことばにとどまっていなさいが最後です。

3番目の3章8節からの「神の真の恵みであることをあかし」というのがどういう意味かなと考えていました。恵みのあかしというようなところは、たくさんあると思いますけれど、例えば、使徒行伝14章3節のパウロのあかし、14章17節の神様のあかし、15章8節はペテロがあかしをしている。1コリント2章4節に恵みのあかしについて書かれていますけれど、御霊があかししてくださるということが書いてあります。恵みのあかしであるという(1ペテロ) 3章8節からのところは、十字架と復活の恵みを証言しているということなのですが、私は「神の真の恵みであることをあかし」しましたというふうにペテロが言っていますので、3章8節から4章11節までのところに、自分を良いものとし、兄弟に良いことをしなさいという段落がありました。その二つも含めて、ペテロは自分でそれをやりました。自分でこの世で弁明しました。正しいことを弁明しました。そして、兄弟に教えました。兄弟に仕えましたというペテロ自身はその御霊の恵みのあかしをしました。私はそれをしましたよということで、「神の真の恵みであること

をあかしし」というのは、言っているだけでなく、やっているよということも含まれて最後の挨拶のところになっているのだと思います。

この1章2節と5章12節に要約されているように、この手紙全体が4つに分けられて、説明されて励まされているものだろうと思います。



ペテロ第一の手紙は十字架と復活の話がいっぱい出てきます。十字架と復活の話を4つの側面で語っている手紙であると言えます。

十字架と復活のことについて語っているこの第一ペテロは、ペテロとヤコブとヨハネとユダの手紙、新約のユダヤ人向けの手紙の4つのグループでいうと、第一ペテロは、過越しの祭りの成就として書かれている位置付けになるかと思います。ヤコブの手紙と同じような感じです。過越しの祭り、つまり十字架と復活。過越しの祭りは十字架と復活で成就しましたよということを教えている手紙になりますね。

その十字架と復活の4つの側面を、また祭りのパターンで教えてくれているということも言えると思われます。1章から2章のところが最初の信仰。2章11節からのところは、1・3・40・7の祭りのパターンでいうと、2番目に書いてあるところは、40年の従う戦いについて。3番目に書いてある御霊の段落は、バプテスマということばも入っているように、ペンテコステの成就。そして、最後の復活の栄光が全世界で褒め称えられる7番目の祭りの成就というかたちで、1・40・3・7という順番になっています。

全体が過越しの祭りで歴史全体の救いが要約されて最初に全てがあらわされたということがいえる手紙の構成になっているのだろうと思われます。